

赤澤は、戦後思想や知識人の問題を考察するとき、日高六郎の「折々の発言」が示唆的であると語っている。「日高の議論は、日本の民衆の巨大な歴史的体験を重視し、それが優先的価値を選択させる根拠になっていると捉えるもので、その歴史的体験には、戦争体験と高度経済成長による生活の変化があるとするものである」（一三頁）というように。「戦後」という枠組みを用いるとき、どうしても「戦争体験」に力点が置かれることが多い。だが、「高度経済成長」のもたらした「生活変化と意識変化」（二二頁）の問題は、「戦後知識人と民衆観」を検討するとき、今後ますます重要になるだろう。本書では、赤澤の藤田省三論がこの問題を考える糸口を与えてくれている。

（大阪商業大学教授）

知識人とは何か

——出原政雄編『戦後日本思想と知識人の役割』評

黒川 みどり

本書は、同志社大学人文科学研究所に設けられた研究プロジェクト「戦後日本思想の総合的研究」（二〇一〇年四月～一三年三月）の一六本の成果論文集であり、以下の内容から成る。

序論 戦後日本思想への新たな関心の高まり（出原政雄）

第一部 天皇制・ナショナリズム・アジア

第1章 藤田省三の戦後天皇制論（赤澤史朗）／第2章 橋川文三のナショナリズム論（平野敬和）／第3章 竹内好の「アジア」「中国」「日本」（萩原稔）／第4章 「対米自主」の思想（望月詩史）

第二部 平和思想・市民主義・社会科学

第5章 矢内原忠雄の戦後平和思想（出原雅雄）／第6章 生活綴方運動と民衆の思想（長妻三佐雄）／第7章 内田義彦における社会認識の「生誕」（田中和男）

第三部 自由主義と変革思想

第8章 多田道太郎の自由主義（根津朝彦）／第9章 「悔恨共同体」の断層（織田健志）／第10章 「戦後思想」における転向論（福家崇洋）

第四部 戦後文学の思想

第11章 出発点としての「政治と文学」論争（岩本真二）／第12章 昭和の記憶と幕末・維新の「物語」（竹本知行）

第五部 福祉・ジェンダー・反戦・沖繩

第13章 社会連帯思想の戦前・戦後（池本美和子）／第14章 公娼廃止後の娼娼運動（林葉子）／第15章 ベトナム反戦から内なるアジアへ（黒川伊織）／第16章 沖繩独立論の検討（櫻澤誠）

本書は、「戦後日本の「知識人」を「広く解釈」し、①戦前からの著名な知識人、②戦後言論界を代表するような知識人、③名前の知られた学者であるが、まだ本格的な研究が少ない知識

人、④市民運動や沖繩・ジェンダー・社会福祉などの戦後的課題の中で発見された行動する知識人、の四パターンに分類される幅広い知識人をとりあげたものである。

「戦後日本思想」の考察の系譜」が、第一期／一九七五年ごろから始まる「戦後思想」研究、第二期／一九八〇年代以後の「戦後精神」、近年の「戦後知」研究、そして第三期／九〇年代における丸山眞男ら著名な「知識人」を軸とした研究と整理され、そのなかで本書は、「戦後日本思想の様々なテーマについて有名無実を問わず主として戦後に活躍した知識人の役割に注目して考察した点では一九九〇年代以後の「戦後知識人」研究に連なる」（四頁）という。個々の知識人について、戦前・戦中と戦後の相互関係、一九五〇年代の言論活動、の二つに着目して論じられる（「序論」）。

実際にとりあげられている知識人はまさしく多岐に及んでおり、藤田省三、橋川文三、竹内好、鶴見俊輔といった戦後の代表的知識人から、戦後に行われてきた「転向」研究、中野重治らの「政治と文学」論争に関わる文学、「国民文学」を代表する司馬遼太郎、そして社会連帯思想、廃娼運動、ベ平連など市民運動などに関わるものまで広範囲にわたる。

第一部から第五部までの腑分けは一六論文をまとめるための便宜的な要素が強いと思われるので、個別に論文について見ていく。

第1章赤澤論文は、藤田省三の天皇制論を通して国民主権の

下で、本来存在理由を欠いているにもかかわらず天皇制が受け入れられることの意味を問うており、第2章平野論文は、橋川文三のナシヨナリズム論を、戦争体験との関わりにおいて位置づけた。第3章萩原論文は、改めて竹内好の「アジア」論・「中国」論を問い、また第4章望月論文は、戦後の石橋湛山の対外認識を「対米自主」と称し、その意義を論じた。戦後の矢内原忠雄の「平和思想」を描き出した第5章出原論文、そして鶴見俊輔の東井義雄論をとおして生活綴り方運動を論じた第6章長妻論文と続き、第7章田中論文は、内田義彦の社会科学認識を追った。第8章根津論文は、多田道太郎の「自由主義論」を、第9章織田論文は、「悔恨共同体」に着目し、長谷川如是閑と中野重治を論じた。「戦後思想」における転向論をとりあげた第10章福家論文は、転向論を幅広く見渡して腑分けを行ったものである。続く二つの章は文学を取りあげたものであり、第11章岩本論文は、中野重治に焦点を当て、「政治と文学」論争のとらえ返しを行った。第12章竹本論文は、「国民作家」司馬遼太郎の再評価を試みたものといえよう。

なかでも、藤田の思想と天皇制論の双方に、従来論じられてこなかった側面から光を当てた赤澤論文、そして「キリスト教的普遍主義」と「ナシヨナルな使命意識」との相克を追いながら矢内原を論じた出原論文、そして、鶴見の東井論から知識人と民衆のあり方について「そのどちらかが相手を導く」という関係とは異なる関係」（一四一頁）を提示した長妻論文は、とも

に丁寧な論証で示唆に富む知識人論として受けとめた。

それら一連の論文とは性格を異にし、諸運動・社会問題をめぐる動向を分析したものとして括られているのが第五部である。第13章池本論文は、フランスから導入した「社会連帯思想」の変遷を戦前戦後を通して明らかにしたもので、戦後はとくに糸賀一雄を中心に据え、歴史学で取りあげられることの少ない「社会連帯思想」についてわかりやすく変遷が示されている。第14章林論文は、売春防止法制定過程の女性議員たちに焦点を充て、その経過やそこに内在する問題を丁寧な追ったものであり、従来その点を明らかにした研究はなく、教えられるところが多かった。第15章黒川論文は、これまで研究のなかったべ平連運動の神戸のありようを明らかにしたものである。第16章櫻澤論文は、これまで焦点が十分に充てられてこなかった大宜見朝徳の独立論を明らかにしたもので、林論文と同様、とりわけ研究史上の意義が大きく、教えられるところも多かった。

紙幅の制約もありすべての論文については言及できないが、本書はこれらからも明らかかなように、そして冒頭でも言及したとおり、「戦後日本思想」の研究成果の集成であるため、狭義の知識人論として論じることがむしろかしく、以下に、いくつかの気をついた点を提示したい。

第一に、従来、研究対象にされることの少なかった「保守」の立場をも含む多様な知識人をとりあげていることが、本書の大きな特徴といえよう。戦後の石橋湛山の外交政策に焦点を充

てた第4章望月論文、多田道太郎の「自由主義」を論じた第8章根津論文、戦後の長谷川如是閑の「日本人」論に注目した第9章織田論文、そして「国民作家」として司馬遼太郎を論じた第12章竹本論文などがそれに当たるといえる。「保守」に注目したのは、編者が萩原延壽の「革新」が自己を鍛えるためにはあえて「現代の享受」に傾く「保守」の挑戦を受けてみる必要がある」との提言を引きつつ、「革新」と「保守」の両者を含む「知識人の役割」の必要性を説いていることに示されているように。

しかしながら、個々の論文では、大杉栄のアナキズムまで視野に入れる多田道太郎の「自由主義」が、「戦後史の文脈の中で……どのように位置付くのかは次なる課題としたい」とあり（根津論文）、むしろその点こそが提示されるとよかつたのではない。あるいは織田論文は、「如是閑が戦後に展開した議論を、古き良き「日本」への愛着を説く「保守的」なナショナリズムとして切り捨てることは、むしろ容易であろう。だが、ナショナリティや共同性をめぐる問いは、理性や合理的な判断で割り切れる問題ではないだろう。自民族中心主義の誘惑と底なしの懐疑論の危険に耐えながら、日本人の共同性を問いつづけた如是閑の試みは、その失敗も含めて、決して他人事では済まされないのである」（二二二頁）と結び、本文中では学ぶべき興味深い指摘も多かったが、「新らしき規範意識」（丸山眞男二〇七頁）を求めることなく、戦後の転向後の長谷川の「日本人論」に注目し、それに批判を加えることなく論を終えてしま

っており、そこから紡ぎ出される知識人をどうとらえればいいのかの逆らうか、との疑問が残る。司馬遼太郎について論じた竹本論文についても、「画一化」のくびきを脱した日本人の多様性」を打ち出し、「真実」としての幕末・維新の国民国家建設のストーリーを提示した」（二九〇頁）として評価するならば、これまで中村政則をはじめとする歴史家たちが「司馬史観」批判を行ってきたこととどう対峙するのだろうかとの問いを発しなくなる。そのような点をはじめ、先行研究に対する応答もほしかった。

第二に、それらに一端が示されているように、発掘され再評価される、主として「保守」思想が戦後思想のなかで持つ意味の追究がなされてもよかったのではないか。そうでないと、ともすると「保守」思想のまるごと肯定ともとられかねないのではなかるうか。「保守」思想に限らず全体をつうじて権力と対峙する「政治」の観点が比較的稀薄で、「権力との緊張関係をもたずに非政治的に「内的自由」を探求する傾向を有した」という、根津論文（一八〇頁）の大正教養主義についての指摘と、ある意味で相通する点が生じてしまうのではないか。

第三に、そのことは、本書所収論文の多くが、「知識人であること」を自明のこととしてそれぞれの選びとった研究対象と向き合っていることにもつながっている。

私たちは、『戦後知識人と民衆観』の「はじめに」（赤澤史朗執筆）において、「私たちがもし『戦後知識人論』というもの

を構想するならば、その民衆への向き合い方を検討し、民衆への距離の意識と、逆に民衆に対する共感を手がかりに、その知識人としての生成と変転の過程を明らかに出来ないかと考えた」と記したように、民衆との向き合い方のなかで知識人と民衆という線がどこに引かれ、引き直されるのかを問うてきた。

その上で、狭義の知識人に限らず、高等教育を受けたか否かとは別に、地域の諸運動のリーダーや民衆の現場を見つめる発信者・表現者を含めて、知識人を「広く捉え」て同書を編んだ。

おそらくは本書とその点で異なっており、そのことが本書では、私たちが射程に入れた以上に、幅広く研究対象を広げることにもなったのだといえよう。そのメリットもまた大きいにちがいない、それを承知であえて述べるとすれば、今日、知識人の不在がいわれるようになって久しく、また思想史研究においてもかつての知識人論や民衆思想史の研究成果が批判的にせよ継承されることなく、さまざまに論じられるという傾向が強いように思われる。そのようななかにあつて、それゆえにこそ、権力、そしてその権力関係なかに生きる民衆との関わりが強く意識されてもよかったのではなかるうか。「序論」においても、竹中佳彦の「冷戦の終結やソ連の解体、「五五年体制」の崩壊によって、保革イデオロギー対立の意味が失われたといわれる現在だからこそ……理念を提示する知識人が必要だ」という提起への共鳴が表明されており（三頁）、「国家秩序」との関わりにおいてその理念、そしてそれのもつ意味づけが明瞭に出されると、

よりよかったのではないか。

しかしながら、本書は、先にも述べたように若手研究者も含めての共同研究の成果という性格を強くもっており、必ずしも「知識人」論に絞り込んだ共同研究というわけではなからう。そうした論集の役割も大きく、思想史・文化史の研究状況に照らしても、新たな足跡を残すことにもつながっているのだといえよう。

追記 本稿をまとめるにあたり、「戦後知識人と民衆観」の共編者である赤澤史朗、北河賢三の両氏からご意見をうかがって参考にし、黒川の責任において執筆した。

(静岡大学教授)